安全運行サポ協

# 体調予報の研究加速

## 今秋、試作版で実証へ

車載器やヘルスケアメーカー、運送事業者などでつくる安全運行サポーター協議会は、ドライバーの体調を事前予測する「体調予報」の実用化に向けた取り組みを進めている。昨年度から具体的な研究に着手し、体調予報の基礎モデルを構築した。今年度は五百人以上のドライバーに活用してもらい、精度の向上や課題の抽出を図る。

一日開催の活動報告会で、体調予報を研究する標準化ワーキンググループ（＝WG）の田中充主査（トランストロン）が進ちょくを説明した。平成三十年度をめどに仕組みの基盤をつくり、サービス展開できる環境を整える。

体調予報はデジタルタコグラフ（運行記録計）の運行・労務情報と、身長・体重から肥満度を算出する「BMI」、睡眠状況などを組み合わせ、各ドライバーの疲れ具合いを予測する試み。点呼や配送計画を立てる際に活用することで、過労運転防止につなげる。

### 疲労度を60％まで完全一致

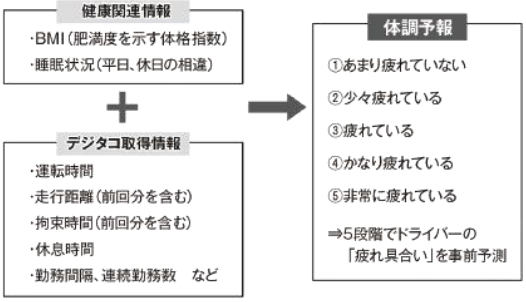
昨年度は協議会に加盟するメーカー、物流企業が協力しながら、体調予報を行う上で必要な仕組みを構築。約六十人のドライバーを対象に、実際に感じる疲れ度合いとデジタコから得る情報に相関関係があるかなどを分析し、六〇％の確率で疲労を確実に予測できるまでに精度を高めた。

今年度の研究では、デジタコに加え睡眠計、活動量計、生体センサーのデータを活用。休息時間、荷積み荷降ろしなど運転以外の業務情報を組み込み、予報の精度向上を図る。今秋にはトラックとバスを合わせ、五百～千人のドライバーに試作用の体調予報を使ってもらい実証研究を重ねる。

### 健康管理などのモデル構築

また協議会では体調予報とともに、ドライバーの健康管理を支援する取り組みを進める。同分野の研究を担当するワンストップ化WGが九州大学と共同で、どういった生活行動、条件が重なると、病気や疲労などにつながりやすいかを示すモデルを構築。リスクを前もって予測し、ドライバーに何を優先して対策を打てばいいのか、アドバイスできる体制を整備する。

安全運行サポーター協議会は、四年前に起きた関越道のバス事故をきっかけに設立された民間団体。労働科学研究所の酒井一博所長を会長に、車載器や健康機器メーカー、運送事業者、有識者など四十を超える企業、団体、個人が加盟。事業用自動車の健康過労起因事故を防止するため、民間の視点から運行・労務・健康を一元管理する仕組みづくりを進めている。

（小林　孝博）

体調予報のイメージ（平成27年度時点）